
コミュニティを探して

(9)

藤 信子

京都の町中のAデイサービスセンターを、大学院の心理・教育相談センターの実習生と月1回の訪問を始めて、いつの間にか8年たった。ここでの活動の発端には、高齢者や介護者のケアを考える時には、できるだけその人たちが生活する場所の近くに行くことから始まるという思いがある。このようなコミュニティ心理学的アプローチを、実習生にも体験して欲しいと思ったことが一方にあった。そして、その頃の実習生が介護の研究をしていた縁で、このデイサー

ビスセンターに出かけることにした。デイサービスセンターは福祉法人の中の一施設なので、スタッフの交代があるため、訪問した当初からのスタッフはもうおられない。この間、施設のニュースレターに紹介記事を書くのだけれど、いつから来られてますか?と聞かれ数えてみて、今まで一緒に来た実習生のことも思い出しながら、そんなになるのかと思った。

ここでの体験について、これまでは、コミュニティにおいて訪問という形での関わ

りについでまとめ（藤・枝廣・松本・山下・山本 2007）（藤・後藤・前田 2010）、および訪問する時に一緒に行くレクリエーションについての考察（石川・藤 2008）、また継続して通う中で聞くことができた利用者の語りなどからうかがえる高齢者の生活者としての強さについて考えたこと（藤・石川・清水・小牟禮・後藤 2009）を報告してきた。数ヵ月前にスタッフから「（法人の）他の施設にも来てもらえるだろうか」と聞かれ、私たちの訪問が評価されていることに改めて気づき、また役割について考えた。

これまでも利用者の方々からは、顔を覚えてもらったり、帰る時には「またね」と言われ、訪問のやりがいを感じていたし、スタッフからも「ちょっと他ではないクイズをしている」という評価を受けている」ということは聞いていた。これは私たちが、持っていく「京都クイズ」や「漢字クイズ」は、利用者がよく知っていること、得意な事を材料にしているため喜ばれる、そして京都に関する知識の乏しい実習生と私に話すという交流のきっかけとなるという目的もあり、その工夫を評価してもらえることは嬉しかった。時間さえ許せば、他の施設も訪問したいが、現在のスケジュールでは、A デイサービスセンターを訪問するように定期的には行けない。そこで、このようなコミュニケーションツールとしての、クイ

ズの作成の仕方や、活用についてまとめた（藤・宮森・宮脇 2014）。まとめの報告を書きながら、これまで8年継続できたことについても、振り返ったほうが良いと考えた。コミュニティに出かけて実践し考察する時のポイントについて、今まではアクティビティの内容などの点からみてきたが、ここではそこでは触れなかった活動の準備等について振り返ろうと思う。面接室での相談などの状況で、サービス提供者がセッティングをしている中に、利用者が訪れるのではなく、利用者の生活の場に出かけて、こちらのできるセッティングを考えていきたい。

Goodman & Weiss が心的外傷の患者の集団精神療法と行う場合、コミュニティのリーダーとの良いコミュニケーションを持つ必要性を述べている（藤 2009）が、これは災害に限らずコミュニティでの介入・ケアについて大事なことだと考える。私が研究科の修了生に紹介されてA デイサービスセンターを訪れ、地域に住む高齢者と実習生の交流を望むことを伝えた時に、「念を押すようですが、利用者を傷つけるような質問とかはされませんか」と聞かれた。デイサービスセンターとしては、しばらく前にある大学からの学生の高齢者の意識調査の質問紙の内容が、ひどいという印象を持ったため、大学からの調査等については神経質になっているのです、ということだっ

た。そうして始まったのだが、数年経つと訪問する前に、施設のほうから「今週見えますが、紅葉狩りの半数が出かけるので、スタッフも少なくなります。宜しく願いします」というように前もって電話がかかるような付き合いになっていき、そういうことの中で、施設のスタッフとコミュニケーションを良くするのは、付き合いの結果でもあることを実感した。性格やこれまでの臨床にもよるのだろうが、私は短期集中型の実践や研究にはあまり関心が無く、長い付き合いの中で見えるものを探すが合っているので、時間の限られた研究ではできないし、一般化は出来ないが、コミュニティ介入の一つのポイントではないかと思う。

二つ目は、クイズの準備について考えたことだが、高齢者との交流については、相手の豊富な知識に触れたいという関心を持つ中で、ツールを準備したことが、長続きしたことに繋がっていると考え。核家族の中で育った若い実習生に、デイサービスセンターの利用者が、クイズをしながら、自然に戦争中のことや以前の暮らしについて話すことを聞き、実習生は地域の生活の歴史に触れることもできた。そのような話が聞ける中で、関心を持って訪問していることが伝わるのだと思う。このためには1年を通じた実習で、修了後にレビューをして話されたことについて、分からないとこ

ろを話し合う事なども必要なことだったと思う。

そしてやはりケアには人手が必要だということ、関わりについてまとめると見えてくる。クイズを持って行っても、用紙を利用者の前に置くだけでは、関心を持ってもらえるとは限らない。一人で解く人、周りの人と相談しながら解く人は良いとして、あまり関心を持たないかのような人にも「どうですか?」「私は(答えは)〇〇だと思うのですけれど、どうでしょう? 答合わせをまちますか」など話しかけながら、いろんな人ができるだけ参加できるようにする工夫がいる。このためには、20人の利用者に対して、4-5人のスタッフがいたほうが皆の様子がわかり、参加する雰囲気を作りやすい。これは、この訪問を浅井(2006)のいう「居場所」としてのグループ・アプローチとして考えてきたからであり、グループであることに留意することで、クイズを解くと言う一見したくない人が多くなりそうな場を、楽しむ人の多い場に行っているからである。クイズを解ける人も、解けずに不機嫌になる人が居たら、楽しめないかもしれない、楽しめる雰囲気を作ることには、いろんな人が加わりやすい方法を工夫する必要がある。そのために、利用者の反応を見ながら次へ生かすことを話し合うことが、大切なポイントとなったと思う。

高齢者との交流を振り返り、コミュニティでのケアの可能性を考える時に、アクティビティのような表に現れる課題のほかに、グループへの介入として意識したことについて上げた。このような観点は場所を共有する中で、言い換えればグループが形成される場におけるケアでは必要な観点だと考えられる。

文献

浅井 健史 (2006) 「居場所」としてのグループ・アプローチ. よくわかるコミュニティ心理学、ミネルヴァ書房、186-187

藤 信子・枝廣 和憲・松本 典子・山下 桂枝子・山本 美幸 (2007) コミュニティで学ぶー2つの「出張するグループ」. 立命館大学心理・教育相談センター年報第6号, 74-81

藤 信子・石川 順子・清水 芳美・小牟禮 尚子・後藤 佳子 (2009) 喪失と寄り沿ってーデイサービスセンターのエピソードー. 立命館大学心理・教育相談センター年報第8号, 56-60

藤 信子 (2009) 災害支援者のためのグループ. 臨床心理学9 (6) 735-739

藤 信子・後藤 佳子・前田 智志 (2010) デイサービスセンターで学ぶことーコミュニティでの実習ー. 立命館大学心理・教育相談センター年報第9号, 94-100

藤 信子・宮森 あさ子・宮脇 晃 (2014) 高齢者デイサービスセンターでの活動ーコミュニケーションツールとしてのクイズー. 立命館大学心理・教育相談センター年報第13号 (印刷中)

石川 順子・藤 信子 (2008) 生活の中で話を聞くことーデイサービスセンターでの体験からー. 立命館大学心理・教育相談センター年報第7号, 45-51